鳴 潮 音

（鳴門教育大学言語系コース（英語）同窓会誌）
第 29 号（2021 年9月吉日発行）

巻頭言

鳴門教育大学英語教育学会
副会長　薮下克彦

本来なら，会長がご挨拶をするところですが，会長の山森が英語教育実践分野長，小学校英語教育センター長，その他諸々の役職で多忙を極めておりますので，僭越ながら副会長の私，薮下が代行させていただきます。ご了承下さい。

ご挨拶の先ず始めに「コロナ禍」が出てきてしまうのは残念なことですが，現在世界的に一番の関心事が新型コロナウィルス感染拡大であることは厳然たる事実であるのでしかたがありません。その上で，鳴門教育大学・大学院の卒業生，修了生，元教官・教員，その他関係者の皆様がコロナ禍をご無事でお過ごしになっていることをお祈りいたします。

さて，コロナ禍という暗雲が立ちこめている昨今ですが，我々，鳴門教育大学英語コースに一筋の明るい光が差し込みましたので御紹介したいと思います。本学学生受け入れ開始（最初の二年間は修士課程のみ）の 1984 年 4 月から定年退職の 2006 年 3 月までの長きにわたって言語系（英語）教育講座に所属し，教育，研究，大学運営に大変ご尽力された本学名誉教授である向井　清先生が，その長年に渡る教育研究の功労が評価され，令和３年春の叙勲において「瑞宝中綬章」を受章されましたので，ご報告いたします。これは本英語コースにとって大変誇らしい事ですので，同窓会員の皆様と御一緒に心より「向井先生，ほんとうにおめでとうございます」と言いたいと思います。

なお，向井先生には，受勲を記念して，本学の思い出を寄稿していただきましたので，次節でお楽しみ下さい。

さらに，「向井先生」に関して嬉しいご報告があります。今度は，向井　清先生ではなく，我々が「アナザー向井」と読んでいた向井　剛（毅）先生です。先生は，1991年9月から2003年3月まで本学に勤務され，これまた教育，研究，大学運営にご尽力されました。向井　清先生に負けず英語コースの名物教授でいらっしゃいました。その向井先生が，今年の 4 月 1 日付で公立大学法人福岡女子大学の理事長兼学長に就任されました。本英語コースにとっても誇らしい事で，向井先生にご就任のお慶びを申し上げるとともに，大学のトップとしての重責を立派に果たされることをお祈りいたします。

Last but not least，昨年の『鳴門英語研究』退職記念論集の発行がご記憶に新しい本学名誉教授でいらっしゃる前田一平先生の事です。先生は，1994 年 4 月に本学に着任，2019 年 3 月に定年退職され，引き続き 2019 年４月から現在まで本学特命教授，本英語コースの「ご意見番」として大変お世話になっております。実は，誠にお名残惜しゅうございますが，来年 3 月末をもって「2 度目の定年退職」を迎えられます。それを記念してと言ってはなんですが，「別れの曲」を寄稿していただきましたので，これまた次節でご堪能下さい。

その他，これまで通り，学会情報，留学体験記，学部生，（教職大学院）院生の自己紹介などありますのでお目通し下さい。私は，「編集後記」でまた皆様にお目にかかります。　Until then so long for now.

１．特別寄稿

「思い出の記」

鳴門教育大学名誉教授
向井　清

この度春の叙勲を機に，かつての同僚である藪下先生からのご依頼で本欄に一筆書くことになりました。

早いもので鳴門教育大学を退職してもう１５年になります。昭和 59 年に赴任した頃は管理棟，人文棟，大学会館しかなく，図書館や自然棟はまだ建築中でした。キャンパスは舗装前の泥土の状態で，雨が降ると泥濘に足を取られて食堂まで行くのが億劫でした。その代わり，新築の建物は設備も研究室も綺麗でＬＬ教室を初め視聴覚機器も整えられており，英語のスタッフは教育２人，語学２人，文学２人，外国人教師１人，助手１人という贅沢な陣容でした。愛媛大学から転勤した私などは過去のしがらみから解放された上に自由な研究環境と風光明媚な土地柄に囲まれて新鮮な気分を味わったものです。発足当初は人文棟の一階に貧弱な

図書室があって院生は文献がないとこぼしていましたが，今ではかなり充実した図書館が出来上がっているのは喜ばしいことです。この間同僚諸氏が退職されたり，転勤あるいは着任されたり，物故された方も数人おられて，今となってはこれらの方々が走馬灯のように脳裏に浮かんできます。英文学の分野では西前美巳先生が大先輩として常に学科運営と学生指導にリーダーシップを発揮しておられました。先生は今もなお卒寿を迎えられてご健在です。私と同年配で開学当初から最も長くお付き合いしたのが英語学の太田垣正義先生です。英語から離れると，いかめしい顔つきとは裏腹に洒落を飛ばして座をなごませてくれる貴重な存在でした。

鳴門英語教育学会が立ち上がったのは，私たち若手の教員と大学院第一期生がささやかな研究会を始めたのがきっかけでした。しばらくして，機関誌を発行しようということになり，『鳴門英語研究』第1号が出来上がったときは，これでこの研究会はいつまでも続ける覚悟をもたなければ，と心に誓ったものです（僭越ながら機関誌の名称は私の発案で，今初めて明かします）。その目的は教員と院生のみならず，これから修了・卒業する若い学徒たち，そして願わくは，広く徳島県下の英語教員にも活躍の場を提供しようという思いでした。その伝統が今日まで受け継がれていることは，後輩の先生方のご努力の賜物と推察しておりますが，近年は実践重視の方向へシフトしていると聞いております。新しい潮流に向かって更なる発展をされるように期待しております。

当初，言語系（英語）教育講座の名で発足した学科名は，今では英語科教育実践分野となったいきさつについて，先日山森先生から詳細な説明をいただきました。ときどき鳴門教育大学のホームページにアクセスしてはいたのですが，余り気にも留めずにいて顔ぶれが変わったなとは思っていました。かつて若造（？）のように初々しい存在であった藪下・山森の両先生が今や老練となってコースを切り盛りしておられるのを見ると，実に隔世の感がします。

私は現在，「日本イギリス理想主義学会」という哲学・政治思想・文学・社会学等を包含した学会に所属し，機関誌掲載の論文の下書きをしている最中です。おそらくこれが人生最後の論考になるでしょう。関心を持っているテーマは「誠実」（sincerity）の概念の歴史的変遷で，これは専門とするトマス・カーライルから触発され長年あたためていたものです。

では紙数も尽きたようです。過去の同僚の諸先生や学生諸君の顔を懐かしく思い出しながら擱筆することとします。皆さまのご活躍をお祈りします。

(7月15日記)

「別れの曲 ― “Do you kill me?”って言うのよ ―」

鳴門教育大学名誉教授・現特命教授
前田一平

沖縄「慰霊の日」

藪下先生に「鳴潮音」の原稿を依頼されながら，生返事のままでした。複数の学会でいくつもの挨拶文や巻頭言を依頼され，もはや題材も尽きていました。また，『鳴門英語研究』の退職記念号でお別れのご挨拶をまとめて以来，同窓会や本学会の会員の皆様に語りかけることはないものと思っていました。

ところが，本日6月23日。沖縄「慰霊の日」。叩きつける雨がうらめしい糸満市摩文仁（まぶに）の丘。私は追悼式のテレビ中継を観ていました。式典で感動的なのは，地元の中学生や高校生が暗唱する「平和の詩」。今年は13歳の中学生でした。それを聴いていてはっと思い立ち，俄然，取りつかれたようにパソコンに向かいました。その結果がこの原稿です。

「平和の詩」はいずれの年も心に沁みます。なかでも宮古高校の上原愛音さんの「誓い～私たちのおばあに寄せて～」（2017年），浦添市湊川中学校の相良倫子さんの「生きる」（2018年），そして首里高校の高良朱香音さんの「あなたがあの時」（2020年）は記憶に鮮明です。

上原愛音さんは，あの日，今の「私」と同じように普通に朝を迎えたはずの おばあ と おじい が見守る空の下で誓います。「この澄んだ空を二度と黒く染めたりはしない・・・この美しい大地を二度と切り裂きはしない」と。

相良倫子さんは，自分が生きている沖縄を「青く輝く海，岩に打ち寄せしぶきをあげて光る波，山羊のいななき，小川のせせらぎ，畑に続く小道，萌え出づる山の緑，やさしい三線（さんしん）の響き，照りつける太陽の光」の美しい島と表現し，そこに生きている喜びをかみしめます。73年前，この島が死の島と化し，やさしい三線の音は爆撃の轟に消え，海は血に染まったと悲しみます。

高良朱香音さんは，米軍迫るあの日の壕（洞窟）にみずからをおき，泣いて声をあげることはなかったので母親が殺さずにすんだ赤ちゃんに，白旗をまっすぐに掲げたので生き延びた少女に，「ありがとう」と語りかける。あなたのおかげで今の自分がいるのです，と。

私は嗚咽を抑えられず，あふれる涙が止まりませんでした。反感を買うことを承知の上で言わせていただきます。「鬼滅の刃」に流す涙があるのなら，その 1% でよいから「平和の詩」のために流してほしい。

「さとうきび畑の唄」と小学校英語教育

森山良子が「むかし，海の向こうから戦がやってきた」と歌った「サトウキビ畑」を映画化したと思われる「さとうきび畑の唄」。まさか，小学校英語教育につながるとは思ってもみませんでした。アメリカ軍（厳密にはイギリス軍との連合軍）が上陸して始まった沖縄戦を逃げまどう家族の物語。お兄ちゃんのお嫁さん（という言い方をお許しください）として家に嫁いできたお姉さんは教員で，妹ハル子が通う小学校の先生。お姉さん先生は学校で夫の戦死を知らされたあと，教室の子どもたちに熱く語ります。「みんなは生きて，戦争のない国を作ってください」。憲兵に連行される前に，お姉さん先生はハル子に駆け寄り，こう言います。「ハル子ちゃん，いい，もしアメリカ軍に会ったらこう言うのよ。“ドゥ　ユー　キル　ミー？”言って，言ってみて，“ドゥ　ユー　キル　ミー？”」はからずも，これは沖縄戦の小学校英語教育になりました。その後，再会した家族はアメリカ軍の上陸に備えて壕に隠れます。しかし，米軍の砲弾を浴びて，お姉さん先生は死にます。死ぬ前に，お姉さん先生はか細い声でハル子に言います。「ハルちゃん，アメリカ兵に会ったら何ていうか，覚えてる？」ハル子はおぼつかなくも答えます ——“ド　ユ　キル　ミ？”「よくできました」という言葉を最後に，お姉さん先生は息を引き取ります。みんなが自決を呼びかけるなか，家族は決死の覚悟で壕から出ます。ひとりの若いアメリカ兵が戦車を降りて家族に近づき，銃口を突きつけます。そのアメリカ兵を見上げて，ハル子は言います。“ド　ユ　キル　ミ？” 虚を突かれたように一瞬の間をおいて，アメリカ兵はハル子の頭に手を置き，やさしく答えます—— “No. It’s OK.”

平和ボケの現代，何のための小学校英語教育か，と問われれば，私はこう答えます。“Do you kill me?” などという英語を教えなくてもよい世界を作るためだ，と。青臭くてもいい。きな臭い（No pun intended.）現代だからこそ，そう叫びたい。とは言いながら，私はそろそろ惜しまれて引退しますけれど。

本論

では，なぜアメリカ兵はハルちゃんを殺さなかったのでしょう。最後に私の文化論を述べますが，逆切れをけん制するために慎重を期します。というのも，何も知らないからこそ，つまり無知ゆえに，人に噛みついてくる人っていますよね。それを私は「イグハラ」と命名します。つまり，ignorant harassment です。私はこれまで何度も経験しました。知っているからこそ，あるいは，知らなくても自己の無知を恐れてこそ，他者を理解しようとする謙虚な心が醸成され，みずからの高慢な感情を抑制できるのです。これは異文化理解（他者理解）の基本姿勢ですよね。

さて，私の文化論はこうです。多文化主義というのは小さなナショナリズムのぶつかり合いに結果します。互いが自国文化を保守し，それに固執すれば，それはグローバリズムではなくて，原理主義的ナショナリズムに陥ります。TPP（Trans-Pacific Partnership Agreement／環太平洋パートナーシップ協定）がよい例です。アジア太平洋地域（というグローバル多文化環境）において，関税の障壁をなくし，金融や商取引あるいはサービスの自由化を構築するグローバリズム協定です。ですが，やれコメは日本の文化だ，やれ乳製品は我が国の文化だから譲れないと自国文化を主張すれば，多文化主義的グローバリズム構築のはずが各国の保護主義を惹起し，他者を排除するナショナリズムが対立します。TPP は 20 年近くも困難な交渉が続き，挙句の果てに当のアメリカが脱退する始末です。例の “America first!” です。一方で，中国主導の一帯一路というシルクロード経済圏構想なる別のグローバリズムが形成されつつあります。グローバリズムという別名をもつナショナリズムの対立は，最悪の場合，戦争に帰結します。もう沖縄戦はいらない。“Do you kill me?” という英語教育も。

多文化主義はフワフワとしたロマンティックな甘い綿菓子ではありません。ワシントン大学の私の師匠は日系 3 世という人種上のマイノリティの当事者として，他者の文化に同化せずに多元文化主義を維持するためには，常に厳しくも繊細で根気強い対話を継続しなければならないと説きます。それを彼は “dialogical

pluralism”（対話型多元論）と呼びます。アメリカのような多人種社会は，多元的な人種民族の単なる共存ではなく，相互作用あるいは対話によって形成されるのです。対話のない自国文化主張は，多文化主義という仮面をかぶったナショナリズムだということです。現在，世界レベルで勃興しているナショナリズムは，そのような視座から文脈づけすることができるでしょう。

ですから，私の多元文化論においては，英語文化はこうなります。英語を発話するときは，英語を話しながらも心は日本人でいていいのだという考えはロマンティックですが，気をつけないと，この砂糖水にリトマス試験紙を浸すと，保護主義やナショナリズムや自国ファーストに変色します。多元的つまりグローバルな環境においてコミュニケーションと相互理解を促進するためには，自国文化をどれだけ他者に譲歩できるかというリアリズムが肝要だと思われます。だからといって，「郷に入っては郷に従え」というわけではありません。このことわざは異文化対応に関わる便宜上の柔軟性を教示しながら，一方で相手の文化に全面譲歩する同化主義あるいは二項対立つまり差別構造を生む精神を表現しています。私の多元文化論は，どこまで異文化の「郷に従」い，どこまで日本人でいられるか，という譲歩主義的ナショナリズムとでも言えましょう。国家レベルの外交問題と同じで，対話と交渉がキーワードとなります。それこそが私の師匠の言う“dialogical pluralism”の意味するところでしょう。そういうわけで，突然ですが，私は“My name is Kazuhira Maeda.”と言います。日本の総理大臣はG7 のような国際会議には奥様を同伴し手をつなぎますよね。不愉快に感じる人も多いでしょう。譲歩は時に不愉快で，まれに煮え湯を飲まされることもあります。実はその不愉快さこそが，根底にあるナショナリズムのうずきなのです。ですから，多文化主義はふわふわした綿菓子ではないのです。譲歩は弱さや追従や敗北ではなく，不寛容に対する積極的対置概念なのです。強い心で譲り合い，歩み寄る。

対話も交渉も国内承認もないまま，なし崩し的に“My name is Maeda Kazuhira.”という言い方に固執する多文化主義という仮面をかぶったナショナリズムや保護主義は，私にはありません。自由とは何をしてもよいというわけではなく，他者の自由をも補償しなければならないがゆえに，多大な制約と束縛を伴います。多様性といっても，何でもありではないはずです。多様性と混沌は表裏一体です。自由が束縛にならないように，多様性が混沌にならないように，私たち異文化どうしが互いに不断の対話をすること，これこそがコミュニケーションではないでしょうか。宣戦布告をする前は，だいたい「交渉決裂」となります。報道でご存じのように，対話の不在は異文化／他者／違いに対する国家や軍による弾圧とセットになっています。なぜ対話が不在なのか。異文化や多様性を認めないからです。

ハルちゃんと若いアメリカ兵の対話を，即ちコミュニケーションを，成功させている要因は何でしょう。交渉の端緒につくための何かが，国家や年齢や性の違いを超えた何かが，人類には既に存在するはずです。再び青臭いと言われるかもしれませんが，それは「愛」でしょう。言語や意識として表象化される以前の太古から培われ，ホモサピエンスとしてのコミュニケーションを可能にする DNA。ですから，out of context に“My name is Maeda Kazuhira.”と発話することは，“ド　ユ　キル　ミ？”と語りかける他者に銃口を向けるようなものではないかとさえ私には思えます。じゃあ，愛って何よ？ 他者を殺さず譲歩する心？少々怪しくなってきたので，噛みつかれる前に私は立ち去ります，この学び舎から。みなさま，さようなら，お元気で，♪So long, farewell, auf wiedersehen, adieu♪，アンニョン，再見（ザイジィェン），Hasta la vista（アスタラビスタ），Au revoir（オルヴォワール）。握りこぶしを鼻に宛てて「チョアッソ」（『マイ・ディア・ミスター』IU の手話より）。

2. 鳴門教育大学英語教育学会の年次大会

すでに本学会ウェブサイトにてご案内済みですが，2021 年の年次大会は新型コロナウイルス感染症の拡大の予防対策のため中止としました。

http://www.naruto-u.ac.jp/course/english/

3. 『鳴門英語研究』次号

昨年度，『鳴門英語研究』の発行を見送らさせていただきましたが，コロナ禍，従来の修士課程から教職大学院への移行によるスタッフの負担増などの諸事情で本年度も発行を見送らせていただくことになりました。『鳴門英語研究』をいつも楽しみにされている会員

様が多くいらっしゃると存じますが，誠に申し訳ありません。お詫び申し上げます。次号に係る情報については，ニューズレターの次号あるいは本学会のウェブサイトにてお知らせいたします。

http://www.naruto-u.ac.jp/course/english/

4. 留学体験記

「日本語教師インターンシップを終えて 」

学部４年　樋上千恵

私は 2019 年 4 月から 12 月までの 8 ヶ月間, SLAP プログラム（School Language Assistant Program）というインターンシップに参加しました。そこでの業務内容は, オーストラリアのブリスベンの州立学校（中学校と高校の一貫校）で，日本語の ALT の役割をするといったものでした。

7 年生, 8 年生（日本の中学 1 年生, 2 年生）は義務教育でドイツ語か日本語か選択しなければならず，学習意欲は生徒によって様々で，中には授業に集中していない生徒のサポートをすることもよくありました。9 年生から 12 年生は選択制で, 日本語に興味のある生徒が多く, 授業外でも JAPAN クラブにテストの練習をしに来たりする生徒もいて，一生懸命学ぼうとする姿勢に私自身も感化されました。自分自身が ALT の立場になることで，ティームティーチングの大切さを実感しました。先生方はとてもフレンドリーな方達ばかりで, ALT としてではなく, Language Department の一員として大切にしてくださって嬉しかったです。最終学期の終わりには多くの生徒や先生方が別れを惜しんでくれました。ほんの 3 タームという短い期間でしたが, 自分が生徒の人生の中で影響を与えられた先生になれたことが嬉しかったです。このインターンを通して, 教師になりたい，という気持ちが強くなりました。

平日は毎日学校に通い, 8 ヶ月間ですが, フルタイムで働きながら, 自分の英語力を磨くということは大変だと感じました。その中での楽しみは, ホストファミリーとの関わりや, 休日に学校外でミートアップという何かの趣味や英語学習など, 同じ目的を持った人が集まるチームに参加したりすることでした。せっかくの海外にいるという環境を活かして, 自分のスピーキング力をもっと伸ばしたいと思い, 積極的に外国人と関わりました。

思い返してみると, オーストラリアでの 8 ヶ月間はこれまでの人生の中で最もたくさんの人と出会った 8 ヶ月になったと改めて感じます。初めての国際便で, 乗り換えに戸惑う私に優しく教えてくれた日本人とオーストラリア人の夫婦から始まり, 慣れない生活の中でいつも居心地の良い生活をサポートしてくれた二家庭のホストファミリーなどたくさんの優しさを受けました。私も優しさを与えられるような人になりたいと滞在を通して思いました。

高校時代から留学はしてみたいと思っていましたが, このような形で海外に行くとは思っておらず, 最初は戸惑いもありましたが, 百聞は一見にしかずで, 現地に行ってみることで, 肌で文化を体験出来る良い機会になりました。何事も挑戦してみるという姿勢でこれからも歩んでいきたいです。コロナ禍で海外に赴くことは難しくなっていますが, みなさんも, コロナが収束してからでも留学や海外インターンシップに挑戦してみてください！

５．連絡先更新のお願い

このニューズレターは，鳴門教育大学英語教育学会のニューズレターではなく，鳴門教育大学学校教育学部の英語科教育コース, 同大学院言語系コース（英語），英語科教育実践分野の同窓会誌として発行しています。学会員の方ではなくても，ご自身の連絡先が変わった場合，english@naruto-u.ac.jp まで「同窓会員連絡先変更（お名前）」でメールをいただければ幸いです。

なお，このニューズレターの PDF 版や，鳴門教育大学英語教育学会および同窓会関係の情報を英語コースのウェブサイトで逐次アップデートしていきますので，時々，覗いてみてください。

http://www.naruto-u.ac.jp/course/english/

６．鳴門教育大学英語教育学会 2021 年度の会費について

鳴門教育大学英語教育学会は，会員の皆様の年会費により運営しております。2021 年度の会費につきましては，お支払いいただかないこととしました。例年 8

月に開催している年次大会を中止としたこと，および，『鳴門英語研究』を発刊しないこと，がその理由です。もしすでに，お支払い（お振り込み）いただいている場合は，返金あるいは次年度の会費とさせていただきますので，下記メールアドレスにお知らせください。

english@naruto-u.ac.jp

７．編集後記（実は，エッセー）

「教科としての英語を改めて考える」

藪下克彦

昨年度から小学校５・６年生で英語が教科化されました。小学校の英語活動にしろ小・中・高の英語科にしろ，英語には，児童・生徒，保護者，社会一般の捉え方が他の科目と違う点があります。それは，「英語科修得は誰もが出来なければならない，それも楽しく」というような考え方です。他の科目には，そのような考え方は無いように思います。例えば，数学や物理は自然にさらに楽しく修得できるはず，と思っている人はそんなにいないと思います。成績が悪くても，保護者から苦情が来るということもあまりないように思われます。また，「楽器劣等感」のある私は，音楽という科目が良く出来て，ましてや楽しく出来て当然などと思ったことはありません。人は何事にも得手不得手があるのです。体育が苦手な人がいるように，英語が苦手な人がいることを認めるべきであると思います。得意な科目で活躍すれば良いのです。

ではなぜ，英語には上記のような考え方が付きまとうのでしょうか。それは，様々な要因があると思いますが，特に，英語が言葉であることとグローバリゼーションのプレッシャーが大きな要因だと思います。ここでは前者を取り上げたいと思います。先ず，一般の人の多くに，そして，英語教育関係者の中にも，「日本語を習得するのに，意識して努力した事もなければ苦労した事もない。英語も日本語と同様に言語である以上，その習得も（本来,）自然で容易でしかるべきである」というような思い込みがあります。しかし，その論理には，日本語は母語で英語は第二言語（外国語）であることが考慮されていません。母語の場合は，赤ちゃんが生まれて育っていく環境で使用されている言語（母語）のオーセンティックで豊富なインプットと親を中心とした周りの母語話者とのやり取りを通し(，多分，現代言語学では通説になっている「言語獲得装置」(Language Acquisition Device (LAD))の助けも借りながら)，自然に習得していくのは容易に想像することが出来ます。しかし，英語の場合，第二言語（「外国語」）ですので，母語のような自然で無意識的な習得は望むべくもありません。オーセンティックで豊富なインプットもなければ，英語母語話者とのやり取りもほとんどありません。従って，外国語としての英語を，特に教科として修得させる際，他の教科と同様に，演繹的で意識的学習が不可欠になります。具体的には，専門学問で確立された知見に裏打ちされた教科内容（発音，文法，異文化理解など）を生徒の発達段階に合わせ，さらに効率的な順序で意識的に理解させたり技能を身に付けさせたりすることです。

英語が教科である以上，他の教科と同じように英語科にも教科内容があることは理解していただけたと思いますが，そこで問題になるのが教師(の卵)の資質です。上で述べたように，教科内容は専門学問（「親学問」と言ったりもします）に根ざしているので，教師はそれらの学問の基礎的知識を持っている必要があります。（大学卒業時または大学院修了時に英語科教科内容に関するすべての知識・技能を身に付けているのは不可能ですが，疑問が出たときにその答えを見つけてくるまたは導き出す手段，方法を実践して身に付けておく必要はあります。）

しかし，心配な状況があります。以下は，ある英語教育雑誌に授業実践例として紹介された中学校英語の授業中に，教員によって実際に発話された(非)文の例です。

*We went to Tokyo, school trip. （「修学旅行で東京に行った。」のつもり）

*We ate biking dinner. （「私たちはバイキングの夕食を食べました。」のつもり）

*Some boys and girls ate and ate many desserts many times. （「デザートばかり食べている男の子と女の子がいた。」のつもり）

また，英語コースの学部生か院生かに関わらず，彼ら彼女らからよく聞く「嘆き」に次のようなものがあります。「文の意味は何となく分かるん/分かったつもりなんですけど，なぜそうなるのか分からないので，生徒に説明することが出来ないんです」というものです。これは代々木ゼミナール講師の佐藤ヒロシ氏が“フィ

ーリング読み”と呼ぶ，現れている単語の意味だけに依拠し，文法(構造)に基づかない読解が原因だと思われます。佐藤氏の著書『関係詞の底力』からの次の例文をご覧下さい。

All the people in Iraq want is peace and security. (p.17)

この文を「すべてのイラクの人々が欲しているのは，平和と安全だ」と訳した人は，フィーリング読みの「立派な」実践者です。（正しい訳が分からない人は，佐藤氏の著書を読むか，私にご一報下さい。）フィーリング読みの例として，本学の英語科教育関連授業での実例を御紹介します。

Hanako turned in the room.

試験問題の一部として，上の英文を訳してもらったのですが，受験者８２名中，正解者が１４名，不正解者が６８名，その内５８名が「花子は/が部屋に戻った/入った」と訳したのです。あらまあ，なんと言うことでしょう。

英語教育の世界では，1990 年代に始まったいわゆる「コミュニケーション重視の英語教育」の名の下，文法が軽視というか「悪者」扱いされています。「文法訳読方式」が教授法として大げさに言えば完全否定されている状況に見て取ることが出来ます。その否定の理由としてよく聞くクリシェとして次のようなものがあります。「英語で会話するとき，相手の言った英文をいちいち文法を考えながら分析していると，相手は一文ごとに止まって待ってくれる訳ではないので，相手の言っていることに付いていくことが出来ない」というようなものです。この主張は，一見（一聞）至極まっとうなことを述べているようですが，文法を知らずに新しい内容の会話文が理解できるはずはありません。上の現象は，文法が要らないことを示しているのではなく，リスニングにおける文法の働きが完全にとは言いませんが無意識になるほど自動化されなければならないことを示しているのに過ぎません。

以上，英語科が教科内容を有し，児童や生徒は帰納的な学習だけでは修得する事は出来ない，よって，教科内容の基盤となっている専門学問(の基礎的内容)に精通した指導者による演繹的で意識的な学習指導が必須となる，しかも，児童・生徒の発達段階に応じた効率的な構成と順序をもって，と論じてきました。その点では，英語科は他の教科と何ら違いはありません。従って，頭書で述べた他の教科にはない英語科に対する特徴的なセンチメント，つまり，「英語は誰でも苦労せずに，楽しく修得されるべき」というのは，英語を他の教科と本質的に違うものと捉える誤解から来るものと考えられます。

以上，教科としての英語に関する私見を述べさせていただきました。読者の皆さんはどう考えられますか。昨年度から小学校でも英語が教科化された今，教科としての英語をもう一度改めて考える機会にしていただければ幸いです。

最後になりましたが，向井　清先生，前田一平先生，急な依頼にも関わらず，快く寄稿して下さりありがとうございました。お二人の原稿で本ニューズレターにギュッと締まりが出たと思うのは私だけでしょうか。それと同時に，本英語コースの来し方・行く末を考えさせられました。先生方を始め他の諸先輩，卒業生，修了生の皆さんが築いてこられた伝統を守りつつ，コロナ禍に代表される激動の時代に対応したコースの在り方が求められています。